

た日光群でデータを収集した。金華山では主目的とした屍体の収集はできなかったが、全群(と思われる)に遭遇し、観察・写真撮影を行った。前記2群と霊長類研究所放飼群(嵐山・若桜・高浜)については、生体計測・X線写真撮影を行った。数値データは、これまでに収集されたものと併わせ、現在コンピュータに入力中である。手のX線写真は既に現像を終え、整理保管しておりTW2法で観察・評価・分析する予定である。マカク類については、骨発育度の評価を行うためのスコア系がまだ確立されていないので、ヒトのスコア系、その確立方法を参考にし、比較可能な系の確立を試みるつもりである。また体色の年令変化も入力されたデータより分析を進める予定である。これまで予備的に分析した結果を以下、記述する。貧栄養や島嶼性等が成長にも重大な影響をもち、新生児期以降思春期までの期間で、成長・発達の両面が性間で様相を異にしつつ抑制されること、それに伴ない性的成熟の遅滞化、身体の小形化が引き起こされることが明らかになった。ヤクザルは、出生時期の発育度が本土亜種に比べずっと遅れているものの、その後の急速な成長でそれに追いつくという特異なパターンを持つことが解明された。このような発育パターン特徴には、新生児・母親の身体サイズ、環境が密接に関連していると推測できるが、それらの関連性の検討や細かい要因の推定には、多くの個体群に関しての分析が必要であろうと思われる。

ニホンザル体毛の地域差についての研究

稲垣昭久(日本モンキーセンター)

ニホンザルの体毛の地域差を明らかにすることを目的として、全国各地に生息するその体毛の収集・比較検討をおこなってきた。本年度は、岡山県勝山、栃木県日光、宮城県金華山において、資料の収集・調査をおこない、勝山で34頭、日光で7頭(前年分と合わせると15頭となる)分の資料(皮ふ・体毛)を採取することができた。また、金華山では資料を得ることはできなかったものの、サルを観察する機会には恵まれ、肉眼的ではあるが有用な情報が得られた。

これらの資料等については、目下、計測分析中であるが、体毛密度についていえば、下記に示す

ように、これまでに認められてきた傾向—寒冷地のものほどその体毛密度は高くなる—を支持する結果が得られた。：下北=1029(本数/直径1cmの皮ふ)、日光=1094、地獄谷=1021、房総(つくばユートピア)=876、波勝崎=794、京都府和知町=802、岡山県勝山=781、淡路島=652、宮島=745、高崎山=856(以上すべて7才以上のアダルトのものについてのみ)。

等電点電気泳動法を用いたニホンザルのタンパク多型検査

川本 芳(名大・農)

ニホンザルの地域分化調査に有効な生化遺伝標識を開発するため、本年度は血漿タンパク2種(アミラーゼ〔Amy〕とGcグロブリン〔Gc〕)の多型について等電点電気泳動法を用いて予備的な実験を行った。

Amyの分析にはpH 8~10、Gc分析にはpH 4.5~5.4の5%アクリルアミドゲルを用いた。

新鮮試料と保存試料の電気泳動パターンを比較した結果、両者のパターンに明瞭な差異は認められなかった。そこで、変異研究部門に保存されている各地のニホンザル血液試料を用い、タンパク多型の有無を調査した。Amyについて125個体、Gcについて104個体を分析した結果、個体変異の存在が確認された。Amyの場合、単一のバンドから成るタイプ(L型)と2本のバンドから成るタイプ(HL型)の2種類の表現型が観察された。波勝崎群から得られた39試料の分析では、L型が5、HL型が34と判定された。2つの共優性遺伝子を仮定し、群内の任意交配からの期待値と観察値を比較すると、両値の間には0.1%レベルで有意差があるとみなされる。従って、ニホンザルの血漿アミラーゼ変異は、1遺伝子座の2共優性対立遺伝子に支配されるとは考えにくい。一方、Gcの場合、単一バンドの表現型2種(H型、L型)と両バンドから成る2本バンド型(HL型)の3種類の表現型が観察された。下北脇野沢群から得られた21試料の分析では、H型が13、HL型が7、L型が1と群内で表現型の分離が認められた。この場合には、1遺伝子座の2共優性対立遺伝子による支配を考えても今のところ矛盾はない。

今回は分析方法の確立と多型の有無を調査する